
幹部学校航空研究センターの 新設を祝して

航空総隊司令官
空将 中島 邦祐

昨年度は対領空侵犯措置に伴う緊急発進（スクランブル）の回数が800回を超えました。これは冷戦が終結した平成元年以来、24年ぶりであり、200回を下回っていた11年から16年までの6年間と比較すれば4倍以上に、23年度と比較すると2倍となっており、日本領空周辺での中国機やロシア機の活動がここ1、2年で急激に活発化している実態を容易に想像していただけたと思います。

また、北朝鮮による弾道ミサイル及び核兵器の開発は継続しており、BMD 統合任務部隊がこれまでに数度編成され、航空総隊はその中核の構成部隊として警戒監視及び対処のための待機を行ってきました。

さらには、航空総隊は昨年3月に航空救難団を隷下に入れ、航空総隊全体として昨年は約120件の災害派遣を行うなど、災害派遣の分野でも持てる能力を遺憾なく発揮することができました。

このように厳しさを増す我が国の安全保障環境と多様化する航空総隊に対するニーズを受けて、航空総隊は約2万7千名の隊員をもって我が国の領土、領海、領空を確実に守るとともに国民の安全・安心を確保するため各種の任務を確実に遂行しています。これも隊員ひとりひとりが使命をよく自覚し、自分の職責を十分に果たしてくれた賜物であり、特に幹部教育の分野において幹部学校が果たした役割は大きいものと考えます。改めて敬意と謝意を表します。

このたび、その幹部学校に新たに航空研究センターが設置されることを航空総隊を代表して心よりお祝い申し上げます。

幹部学校が幹部教育に加えて、航空自衛隊のシンクタンクとして重要な役割を果たし、また、航空総隊をはじめとする実動部隊にとって不可欠の機能を備えてくれることを期待しています。

各自衛隊の教育機関にはそれぞれ特徴があります。陸上自衛隊はそれまで教育機関が保有していた研究機能を集約して13年に研究本部を創設し、幹部学校は教育に特化された機関となっています。これに対し海上自衛隊は25年5月に幹部学校が担ってきた教育と研究の機能を一体化させた組織改編を行いました。そのような中、航空自衛隊は教育と研究を機能分化しつつも、幹部学校長の下に両方の組織を置くこととされました。その趣旨を十分に踏まえ、航空研究センターがその機能を十分に果たしつつ、教育部と有機的に連携して幹部学校としての重要な役割を果たすことが期待されていると考えます。

航空総隊は現状に満足することなく、真に戦える部隊及び隊員を育成していく所存であり、航空研究センターの新設により充実・機能強化される幹部学校とよく連携して航空自衛隊の精強化につなげたいと考えています。

この機会に次の3つの事項について期待を述べさせていただきます。

① ドクトリンの充実

航空自衛隊は24年3月に初めて基本ドクトリンを制定しました。今後は新設される航空研究センターが主体となり、この基本ドクトリンを受けて下位のドクトリンを作成するなどドクトリン体系を維持・整備していくことになります。科学技術の発展とともに進歩する航空兵器や兵器の発展に伴い変化する戦略、戦術思想に合わせて適正にドクトリンを維持していくことが部隊を運用する、あるいは隊員を指揮する航空総隊をはじめとする実動部隊にとって極めて重要であり、幹部学校に期待するところ大なるものがあります。

② 教訓収集とその蓄積

航空自衛隊は今年で60周年を迎えました。これまで対処や支援など数多くの任務を遂行してきました。同時に多くの教訓的な事項も得ました。これは組織にとり極めて大きな財産です。今後は航空研究センターが一元的に、かつ、組織的に教訓的事項を収集・蓄積し、組織の財産として管理していくと承知しています。教訓的事項は生かされて初めて生きてくるものであり、生かすべきところに提供される必要があります。教育のみならず、航空総隊をはじめとする部隊に対しても適時に提供してもらいたいと考えています。

③ シミュレーションを活用した演習の充実

幹部学校が保有する空自作戦用シミュレーション・システム（AOSS）は、平成24年度に航空総隊が保有する航空総隊指揮システム（ADCS）に接続されました。それを受けて25年春に西部航空方面隊及び南西航空混成団がこの空自作戦用シミュレーション・システムを使って初めて指揮所演習を行いました。

空自作戦用シミュレーション・システムは特に指揮官の状況判断、意思決定に関する訓練をより実相に近づけるとともに訓練を効果的に行う重要なツールであり、海上自衛隊の幹部学校が果たしているように、教育機関と部隊が一体となって演習を推進することにより、双方が多くの成果を得ることができ、ウィン・ウィンの関係を構築できると考えます。

最後になりましたが、尾上学校長の強いリーダーシップの下で新設される航空研究センターが充実・発展することを祈念するとともに、航空総隊としてそのための支援を惜しまないことを約束してお祝いの言葉とさせていただきます。